

## 《登呂遺跡》



登呂遺跡は静岡県静岡市にあります。神奈川県や東京都の小中学生が修学旅行で訪れます。弥生時代の遺跡です。私たちが食べているコメは今から約7,000年前に中国・長江の下流流域で作られました。日本に渡って来たのは約2,000年前です。稲作をすることによって狩猟生活の縄文時代は終わります。今では全国各地でその土地の気候風土に合った品種に改良され、おいしいお米が食べられます。

(撮影・文) 中園孝信

## 「日本子ども支援学会」2018年9月フォーラム (2.研究報告編)

日時：2018年9月15日(土) 午後2時50分～4時40分  
会場：東京学芸大学 C204教室

総合司会：清文枝(テレビ朝日アスク)  
第2部司会：中山哲志(東京成徳大学)

### 第2部 研究報告：ワークショップ「アロマザリングの中での養育を考える」

#### 1. 基調講演 「アロマザリングとは何か」

根ヶ山光一(早稲田大学 人間科学学術院)

#### 2. パネル討議「アロマザリング関係の養育の可能性と限界」

パネリスト：①根ヶ山光一(早稲田大学教授)  
②日高真知子(千葉県里親会副会長)  
③青葉紘宇(東京養育家庭の会理事長)

## <はじめに>

司会 (中山): 「日本子ども支援学会」が3月に設立された時、日本のこれまでの学会とは異なる構想と方法に、大きな期待をもちました。先ほど、滝口先生の司会で進められた第1部の実践報告を拝聴して、これ迄いくつかの学会を経験してきた私は、かつてない新鮮な学びの機会の中に自分がいることを感じております。加えて先の休憩時間には、なんとお茶とお菓子もが配られ、第2部(研究報告)も一層素晴らしく和やかな展開があるのではと期待しております。

根ヶ山先生は、深谷昌志先生が設立総会の時に「根ヶ山先生をお呼びして、お話を伺いたい」と決めておられた先生です。実は、3,4年前から数人の者たちが、里親問題をテーマに、文科省から科学研究費を交付され、6月にその結果の報告を兼ねて「子どもの成長とアロマザリング」(ナカニシヤ出版)を出版しました。その本の一つ

の柱は、根ヶ山先生が柏木恵子先生と編著で出版された「人の子育ての進化と文化～アロマザリングの役割を考える～」(有斐閣、2010)で、そこに「親の役割を絶対視すべきではないこと。ひいては子どもを取り巻く環境要因が重要な役割りを果たしうることに對する直感的表現である」とあり、その視点に立てば、「家族、親族、海外からの移住家事労働者、里親など、世界には多様なアロマザーが存在する」というご主張を展開しておられます。

子育ての問題に對してのその視点を、子育て支援にご関心をお持ちの皆さまと今日ご一緒に根ヶ山先生の講義をたっぷり伺いたいと思っています。その後で、千葉県の子親会の日高副会長、それから東京養育家庭の会の青葉理事長に加わっていただいて、パネルディスカッションをしていきたいと思っています。

それではまず根ヶ山先生にお話を伺います。拍手でお迎えください。

## 1、基調講演「アロマザリングとは何か」

根ヶ山光一 (早稲田大学 人間科学学術院)

(なお、会場で当日説明に使われたパワーポイントはすべて省略させていただきます)

根ヶ山: こういう場でお話をさせていただくこと、とても光栄で、私も勉強して帰りたいと思っています。先ほどから皆さん方のご議論を聞いてとても活気のある活発な学会の滑り出しだと感銘を受けておりました。現場の方のとても熱い思いに比べると、私が用意したのはちょっと硬いお話で、もう少し柔らかいお話を用意すべきだったと反省しております。

「アロマザリングとは何ですか」が頂いたお題です。私もまだそんなによくわかっていることではございません。まだ駆け出し、この問題に触れてたかだか数年、長くても15年位の関わりです。そんな中で、私のわかる範囲でお話をさせていただいて揉んでいただく、現場の方からご批判もいただいて軌道修正もしていきたいと思っています。

## <自己紹介>

私は猿の研究者です。動物行動学と発達心理学を足して2で割るようなことをやっています。それを



私は「発達行動学」と呼んでおります。その立場から、母子関係、特に母親が子どもを攻撃するということと離乳のことを、ごく初期に研究していました。それから人の離乳へと問題意識を移しまして、特に「断乳」と言われる、お母さんがおっぱいに絵をかいて子どもを離すという、母子が離れるという道に入っていきます。離乳のスタイルは文化によっていろいろバリエーションがあり、子どもの自立を母親が主導するのか子どもが主導するのかみたいな議論に関心があります。その中で、「多良間島」の「守姉」というものに出会いました。これは後でご紹介しますが、少女が養育ケアをする。遊びの中でケアをしていく。お母さんは赤ちゃんをその少女に任せるということが風習として残っておりまして、これひとつのアロマザリングですね。そういう問題に最近足は突っ込んでいて、こういう感じです。

### <アロマザリングの意味>

アロマザリングとは、動物行動学で言われてきた言葉なんですね。「allo(アロ)」と「mothering(マザリング)」がくっついた言葉で、「allo」というのは「other」ということで「他者による」という意味です。ですので、アロマザリングとは「他者がお母さん行動をする」という言葉です。

「alloparenting(アロペアレンティング)」という言葉もあります。もしくは「allocare(アロケア)」とも言います。それは「allomaternal care(アロマターナルケア)」と「allopateral care(アロパターナルケア)」を合わせた言葉なんです。お母さん行動を他者がするということですが、お父さん行動を他者がするということもあるわけなんですね。また、共同育児といいますが、「cooperative breeding」「shared care」とも言われます。そういう似たような言葉がいくつかあるということです。

2000年ぐらいから、こういう問題に対する関心がぐっと強まってまいりまして、いろんな人がいろんな呼び方で呼んでいます。核になってくるのは、「allomothering(アロマザリング)」または「alloparenting(アロペアレンティング)」です。特に私は、戦略的に「アロマザリング」という言葉を使っています。それは日本社会がマザリング偏重だからです。それに対するアンチテーゼとして、アロマザリングが大事なんだということによって、日本の風潮を軌道修正することを意図しているわけです。ですから私は、アロペアレンティングよりもアロマザリングを意図して使っています。

### <アロマザリングをする生き物>

女王バチの周りを働きバチが取り巻いています。これ実はアロマザリングと言っていいとも思いますが、ハチの世界のことなので、お母さん、お父さん風とはあまり言わないかもしれません。要するに子どもを産むものとケアするものが分業しているということで、アロペアレンティングの一つです。

モリヤツガシラという鳥がいます。つがいがあって、そのつがいが生んだ兄妹が残って子どもに餌を渡したりしています。それをヘルパー、ヘルピングと言いまして、これもまあ、アロペアレンティング(アロマザリング)ということになります。

このようなアロペアレンティング(アロマザリング)は、いずれにしても「血縁淘汰」つまり、自分の遺伝子をいかにたくさん残していくかを重視している戦略なんですね。どちらも、同じ遺伝子を共有するものが、同じ遺伝子をたくさん残すために行動が進化する。アロマザリングのベースには、そういう生物学的な考えがあります。

一方、こちらはニホンザルなんです。若い雌が小さい子ザルのお世話をしながら子育てを学んでいくという行動がありまして、これも立派なアロマザリングですね。霊長類ってというのはアロマザリングが発達していると言われてます。

### <アロマザリングの効用>

アロマザリングをするとどんないいことがあるかと言いますと、まず母親の養育負担が軽くなり、母親の採食の自由度が増大します。そして子どもの成長が促進され、早期離乳できます。すると、母親の

出産感覚が短縮して次々に子どもが生まるといった効用があります。

また、アロマザリングをする若い雌にとっては、子ザルを相手にお母さんになる練習をしているということで、その雌が子どもを産んだ時には第一子の死亡率が減少するということがあります。それから、子どもの互惠的養育と言ってネットワークの中で他の個体が子育てを助けてくれる。こちらも助けるし、向こうからも助けてもらえるといったようなメリット群があります。血縁淘汰の文脈ではありますが、このようにいろいろな効用があるのがアロマザリングということになります。

子育ての学習をするということは、遺伝子が残るということに直結はしていない効用でありますから、直接間接のいろいろな効用があると理解していただきたいということです。

### <ヒトのアロマザリング>

霊長類の中でヒトは、離乳から初月経までの未成熟な期間が長いんです。出産間隔がほかの種に比べて短くて合計特殊出生率が高い、つまり頻繁に子どもを産んで一生涯でたくさん子どもを残すというのがヒトなんです。つまり、未熟な個体（こども）が複数お母さんのもとにいる確率が高くなるということの意味します。だから、協力的育児が必要なんです。協力的育児をするからたくさん子どもができるのか、たくさん子どもを作るために協力的育児をしているのか。どっちがどっちかということは一概に言えませんけれど、とにかくこれがヒトの繁殖を考えた時の特徴なんですね。霊長類はアロマザリングが発達していますが、その中でもヒトはより一層発達しています。それは必ずしも血縁関係を必要としない、血縁がない個体でもサポートをしていく、血縁を超えた協力があるの、ヒトのアロマザリングの特徴なんですね。

Toba というアフリカの母親の生活調査の結果を見てみると、母親は1日に、子育て以外のことをしている時間が意外と長いんです。洗濯があったり、料理をしたり、お喋りをしたり、一日の過ごし方を見ていくと子育て以外にも結構な頻度で時間を使っているんですね。つまり、ヒトは子育てだけをしている生き物にあらず。繁殖以外にも費やされる時間資源をヒトは結構求めているんです。

アロマザリングというのは、遺伝子をたくさん残すために繁殖サポートをしてあげているという以外に、女性のいろいろな「したいこと」を実現するために育児からお母さんを解放してあげるといようなことにも機能しているのです。ヒトの場合は、繁殖に利があるというだけではなく、お母さんを子どもから離して個として動けるようにするという効果もアロマザリングにはあるわけです。それが大きな特徴です。

### <多呂間島の守姉>

台湾に近い日本の殆ど西の端、多呂間島（たろまじま）には、「守姉（もりあね）」という子育てスタイルについての風習があります。昔は周囲の島々にもあったそうですが、今、現存しているのはおそらく多呂間島だけ。写真では（省略）、当時9歳の女の子が小さい子を抱っこして連れて遊んでいます。

3か月から17か月まで行動観察を、ビデオで回しました。守姉がいる場面とない場面で独立の観察をしますと、守姉がいなくてお母さんと子どもが視野外にあることはほとんどないのですが、守姉がいると高頻度で母子が見えないところにいる。つまりそれは、守姉に子どもをゆだねて、お母さんが子どもから離れて別のことをする時間が長くなるということですね。守姉にはそういう働き、効用があります。その守姉は、自分の兄弟や遊び仲間の中に守子連れて行って、一対一の関係ではなくて守姉のグループ、ソーシャルネットワークの中で過ごさせていくということです。

もう少し大きくなって守子の自立性が進んでいくと、守姉は遠くから見守っているようになります。9歳10歳の女の子が、結構しっかりしたことをやるわけです。都会ではちょっと危ないなあと思ってしまうようなことですが、親は守姉を信頼して安心して子どもを預けています。

守姉と守子は圧倒的に母方の血縁でつながっています。母系の風習であり、そういう意味では血縁淘

汰の取り組みともいえます。従妹同士ぐらいの関係が多いですね。しかし血縁のないケースも結構ある。血縁のある場合とない場合で同じように守姉守子の関係があるということで、これも人のアロマザリングが血縁淘汰だけでは単純に説明できない、ということを表しています。

守姉の特徴をまとめてみますと、とくに大きいのは養育者への効果です。守姉が小さい子どものケアをすると親になる学習ができるんですね。それから、被養育者(守子)への効果として、守姉のネットワークに連れて行ってもらえる。そこで、守姉のソーシャルネットワークがコピーされ、社会性がはぐくまれていきます。3つめは親の育児負担が軽減される。親が解放されて別のことができるわけです。そういうことを通じて、守姉も守子も社会性がはぐくまれるということが言えると思います。

村の伝統行事である8月踊りの様子を見てみると、お父さんがいたりおじさんがいたり、お兄さんがいたり、大人が楽しく遊んでいる場所で子どもも遊ぶ。踊りを踊って楽しんでいるんですね。別の場面では、父親の飲酒の場で、子どももお茶を飲んだりしてくつろいでいる。場を共有しているのです。サトウキビの収穫の場では、子どもも手伝いをして、おばあさんが小さい子のケアをしている。守姉だけではなくて、島の大人が子どもをサポートする、ケアする傾向がこの島では色濃く見られます。

ガジュマルの大木に、子どもたちが点々と登ってしまして(省略)、都会ならこんな事は危なくてさせないと思うんですが、島はおおらかで、子どもができること、逞しさとか主体性を尊重して、子どもに自由にふるまわせている様子があります。

そうした島の人たちの気風と、守姉の風習というのはリンクしているんですね。守姉に対する信頼、守子に対する信頼。そういうものがあって、親は子どもが幼い子の面倒を見るということを許容しています。おおらかで風通しのいい風習だと思います。

### <土門拳氏の写真集から>

足利市の1941年の写真(土門拳写真集より)を見ますと、子どもが小さい子をおんぶしている、おばあさんが赤ちゃんをおんぶしている。こんな風に小さい子が、色々な人にケアを受けるというのが、1940年から50年ぐらいの日本では、足利市に限らず色々な地域でごく普通に見られました。多呂間島で今、特殊なこととして見られている風習は、半世紀前は我々の子育ての普通の風習だったと気づかされるわけですね。我々人間は、そういう子育てをする生き物だったんですね。

### <西アフリカ/ガンビアでの調査>

またガンビアで行われた調査では、子どもの死亡率と、その周りに誰がいたのかを突き合せた30年間にわたる貴重なデータがあります。それを見ますと、母親の死は乳幼児の死と関連することがわかります。子どもの死亡率は、お母さんが死んでいると、生きている場合よりも優位に高くなっています。お母さんが亡くなると子どもは死にやすいということを意味します。同じように、母方の祖母の死は幼児(2歳の子どもの)死と関連します。もうひとつ、10歳以上の姉がいると5歳くらいまでの少し年齢の高い子ども(児童)は死にくくなるという統計も出ています。そして、お母さんが再婚すると子ども(児童)が死にやすいというデータが統計的に優位に出ています。

### <子捨て、子育て>

文化人類学者原ひろ子さんが、「ヘヤー・インディアンとその世界」(平凡社、1989)という本で、ヘヤー・インディアンは養子・里子がとても多いと書いています。家族が同じ屋根の下で住むという意識がそんなに強くなくて、養女をもらったりすることが頻繁に起こっているというわけです。家族というもの、の枠組みが緩やかで、人の子どもでも貰って我が子としてケアをするということが、普通に行われている社会ですね。

沢山美果子さんは「江戸の捨て子達」(勁草書房、1998)という本を書いています、その挿絵を見てみましょう。かごに入れられた子どもが捨てられていて、親はこっそり見ている。またその子を発見してどうするかと話し合っている人がいるわけですね。そういう子捨ては、昔は頻繁に起こったことです。といっても遺棄するだけではなくて、拾う人がいたんですね。一昔前は、日本でも「私の子ども」と固く考えないで、「乳もち奉公」といってお金で女性が雇われておっぱいを含ませ、捨て子を育てていくということも普通に行われていたんです。

またベトナムの家庭では、ハンモックに子どもが乗っていて哺乳瓶をくわえているんですが、母親はそのハンモックを紐で、ゆさゆさとゆすってあやしている。日本ではあまり見られない光景です。お母さんが子どもをケアすることの間に、ハンモックとか哺乳瓶とか「モノ」が入っている。こういうモノとの関係も含みながら、子育てがなされているというのが一つの特徴です。

### <ヒトの子育てとアロマザー>

これは保育園です(省略)。複数の子どもと複数の保育士さんが、複数の物に取り囲まれながら子育てをしている。ここでも、モノとヒトとのコンビネーションで子育てが行われているんですね。モノがあって、子育てが助けられているわけですから、私の感覚から言うと、砂場とかブランコとか滑り台とかも、アロマザーなんですね。そのようにとらえてみますと、環境と子どもの間にお母さんが入って、インターフェイスをなしている。その間に、モノや保育士さんのようなヒト、そして保育園というシステムのような2次的なインターフェイスが入ってくる。こういうものに子どもを守らせて、その分お母さんが子どもから離れるということが、人の育児の大きな特徴だと思うんです。

ヒトの子育ては、母親が子どもと絆を形成して愛して育てていくというようなことばかりではなくて、母と子どもの間に隙間を開けて、ヒトやモノやシステムなどを入れ込んで子育てをしている。そういう仕組みが大事なんだということです。

アロマザリングの考え方の出発点は血縁淘汰、メスが残ってアロペアレントとなってというのが基本なのですが、それがベースラインだとしますと、ヒトはそこからかなりアロマザリング、アロマザーを拡散しています。父親もアロマザー、祖父母や兄妹もアロマザー、そして非血縁個体も協力的育児を行うし、里親さんなどもアロマザーとなりうるし、モノやシステムもアロマザーと呼びうるのです。例えば保育士さんがアロマザーだとすると、保育園というシステムもアロマザーだろうし、保育園を作る機構や保育士を育てる教育機関などもアロマザーといえるし、アロマザーのネットワークには膨大なものがあります。そういう膨大なアロマザーに囲まれてヒトは子育てをしているという認識を持つべきだと思っています。

アタッチメントから見ると、それはどうかなと思われるかもしれませんが、それがヒトの子育ての大きな特徴なんだと思います。

### <シクミによるアロマザリング>

赤ちゃんポストに赤ちゃんが預けられると、その子は社会的な養護の中に入っていくことになります。児童相談所に行ったり児童養護施設に行ったり、ゆくゆくは里親と特別養子縁組をしたりとそういうところに流れていくシクミ、フローチャートができていて社会的な養育に入っていく。そういう中で子どもが死なずにすむということが実現されているわけです。

こうした「シクミによるアロマザリング」には、養子縁組制度や里親制度など、家庭という枠内に取り組むという終着点と、施設に預かるというような家庭という枠の外に取り込むという終着点があります。いずれも子どもを支えるというシクミなわけです。これが問いかけるものとして、養われるべきものと養われるものとの組み合わせが、ヒトの場合とはとても多様であるということ。また、繁殖や血縁淘汰といったことばかりではない生物性を超えたヒトの育児、社会文化的な育児というものを教えられます。

そして、これは今日、皆さんから私が教えていただきたいものとして、疑問形として投げかけるものですが、「家庭」「親子」「家族」とは何か、それらを家庭の中に取り込むということとは何だろうかなど、そうしたことについてみなさんはどんなことをお考えなのか教えていただきたいと思っています。

もともと生物的には母親が主要ケアラーです。母親が子どもを生み出す主体ですから。そこにヒトやらモノやらシクミやらが入ってきて、離れつつ守る、離れながら子どもを放置しない、守らせるというのがヒトの育児の大きな特徴だと思うんですね。血縁・非血縁個体によるアロマザリングがあって、モノやシクミもアロマザリングを形成していて、重層的複合的なアロマザリングシステムが構築されている。そういうものによって共同で育児をすることが実現されているのが、ヒトの育児です。

では、そのように多様な複合的システムが入ってきて育児が相対化され、社会的養育が実現されてきた時、つまり、母親だけが子どもの面倒を見るということではなくて、いろんなヒトやシクミがそこに入ってきてシェアしながら子どもの育ちを社会の中で実現していく時に、何が問題として残っていくのか。

例えば里親や養子縁組をした時に、「生みの親へのこだわり」というのは残るのかなど、これは私の直感的な問題意識、推測ですが、そういうことも含めて、皆さん方が取り組まれている中で体験されていることやお感じになっていることも、今日は皆さんにお聞きしたいと思っています。

**司会 (中山):** 根ヶ山先生、どうもありがとうございました。  
まず、先生のお話に関してご質問があればと思います。

**会場 (金子書房：亀井):** 守姉というのは非常にシンプルなシステムで、合理的ですね。昔は、兄弟が下の子を見るということもありましたし、童謡にあるように仕事として「子守」が行われていましたが、今はないですね。多呂間島では何故これが、仕組みとして残ったのかをお伺いしたいです。

**根ヶ山:** 二つあります。守姉は血縁がないか、もしくはいとこ同士位の関係が多いですが、それ以外にもお姉ちゃんが下の子を見るということは良く行われています。それは別枠で、「守姉」とは言いません。データを取ってみますと、第1子から第3子位に守姉をつけるケースが多いです。この島はとても子どもの多い島なんですね。で、第5子、第6子とかになると、成長した上の子が見るんです。そういう意味で言うと、「子どもがケアをする」という頻度はとても高いです。今日お話したケースでは、兄弟間のケアは外しています。

今は少し形骸化が進んでいますが、しっかりやっていた頃は、守姉は「結納式」のようなことをするんですね。「是非うちの子の守姉になってください」と親に申し入れに行くと、親同士で結納を交わすような行動をするんです。ご馳走を持っていってお願いをする。そうすると、少女は選ばれたというプライドを持つわけですね。

守姉をしている少女に、「遊べないし辛いなの？」と聞くと、「辛い」と言うんです。誇りに思っているし楽しみながらやっていると僕に語ってくれるんです。だから、五木の子守歌のように、奉公に出て泣く泣くケアしているというのはモチベーションが全然違うという気がしますね。意気を感じてやっている。しかもそれは、遊びの中で子どもを家の外に連れ出して行っている。自分のソーシャルネットワークの中に守子連れて行って遊んでいるわけですから、奉公に行ってケアする役割を負わされているというのとは違うんです。

おそらく、多呂島の守姉のような方法が、人類の子育ての中では根付いているものだったのではないかと思うんですね。今日はガンビアなどの例もご紹介しましたが、文化人類学者がピグミーとか色々なところに入ってみますと、10歳くらいの女の子が赤ちゃんの世話をするというのは頻繁に出てくることです。今の都会では見られなくなってしまいましたけど、本来、人類の子育ての中にしっかり根付い

ていることなんだと思うんです。

**司会 (中山) :** ご質問がないようでしたら、ここで一度深谷先生から、根ヶ山先生のお話に関して、まとめを頂けますか。

**深谷 :** 根ヶ山先生のお話を伺ってしまして、アロマザリングは決して日本の文化と関係のない話ではないんですね。大藤ゆきさんの書かれた「児やらい」（三国書房、昭和19年）という本がありますが、それによると、日本では子どもが生まれると、「7歳までは神の子だ」と言って、みんなで育てていたわけです。特に農家の大家族なんかでは、お母さんは働き手なんですから、生みのお母さんは居ても、育てるのはむしろおばあちゃんだったんです。今、先生のおっしゃったアロマザリングというのは、日本の農村社会では普通にあったものだったのでしょうか。それが、大正時代になって、サラリーマンが登場して、もっぱら専業の母親が育てるようになり、特に戦後の核家族化で、我々は「子育てイコール母親」と、なってしまったんでしょう。

先生のお話を伺っていて、「なるほど、これは新しい視点だ」と思ったんですけど、実は先生のお話は、他の国の未開社会の話ではなくて、日本でも昔から行われていた普通のことだったのだと思いました。

## 2. パネル討議「アロマザリング関係の養育の可能性と限界」

**司会 (中山) :** この後は日高さん、青葉さんのお話を伺いたいと思います。根ヶ山先生のお話の中にアロマザーという言葉がありましたが、お二方とも里親制度という「シクミ」の中で中心的な活動をしておいでの方でいらっしゃいます。そういう意味で、今の根ヶ山先生のお話を受けて、自由にお話しいただきたいと思います。

では、まず日高さんから話しいただきたいと思います。よろしく願いいたします。

**パネリスト : 日高真智子 (千葉県里親会副会長)**

**日高 :** 親の庇護を受けられない子のアロマザーである里親を始めて25年。現在、千葉県の里親は433名、委託されている子は186名で、一時委託の子は5名おります。長く里親をしているうちに、里子や養護施設の子どもについて、今の児童相談所の機能に問題点がたくさんあることを知りました。とりわけ「親子相談所」設置目指して、私たちは行政に働きかけております。

日本では、里親に託される子と養護施設に預けられている子の割合は、現状では1対9位です。厚労省は、それを平成27年から15年間で、里親、ファミリーホーム、養護施設のそれぞれの割合を3分の1位にしていく目標を掲げております。里親家庭を大幅に増やすということです。しかし、そうした子どもを受け入れるだけの環境にある養育家庭を用意できているのでしょうか。

かつては、里親になるのに5年から6年7年と待つことが必要でした、エリアによっては、今は申し込んだらすぐに赤ちゃんが来るようにもなりました。親になる心の用意がまだ十分でない状況で、子どもが来てしまう場合もあります。里子を養育し始めると、今度は「その子たちを養子にしたい」と希望される里親さんも出てきます。それぞれの家庭にそうした子がポンと来て、親としての種々の準備ができているのでしょうか。

最近では里親に、養護施設の職員、または心理判定士が、協力員や支援員として、公的につくように





なって、里親の相談に乗ってくれるようになりました。一歩前進ですが、まだまだ足りない。里子に対する心のケアも、今の状況では十分でないと思います。

### <親子相談所の設置を>

里子には、時期を見て「真実告知」がされますが、子どもの心の中に、里親という新しい両親、実の両親、4人の親が頭の中でグルグル回ります。小学校5年生位から中学高校位でしょうか。「自分って、いったい何なんだ」と思うようになります。その子に「あなたの家系は、性格は-----、里親さんはこんな風に見守ってくれているよね。安心だよね」って言ってくれる人が必要です。

里親さんと相性が合えばいいのですが、そうでない時もあります。高校が終わったら里親と里子は別れます。今は大学までになりましたが、わずか4年延びただけです。18歳以降、または22歳以降の精神的なぐじゃぐじゃを、誰が解決してくれるのでしょうか。子どもは子ども達の精神的な安定や経済的な自立をしっかり見つめる「親子相談所」のような制度を作りたいと思っています。

#### \*親子相談所の主な役割（レジュメより）

- ・社会福祉士、保健師、心理判定士などが常駐し、長期的な心のケアをする
- ・保護者による虐待が疑われる場合は、やめるまで親子相談所に通うことを義務付け、心理状態が改善するように継続して見守る
- ・子どもたちは、措置解除後も無料で心理士や心理カウンセラーに相談することができるさらに、ハローワークや社会福祉協議会等と連携して、長期的に心理的自立および経済的自立の両方をサポートする
- ・家庭裁判所の機能を持ち、必要な場合には親子の関係に対し法的措置をとる

### <長期のフォローを>

私たちは子どもたちの心理状態を安定してみてくださるシステムが欲しいと思います。「親子相談所」に、その機能を期待したいと思っています。とくに虐待を受けた子には、長く心理面でのケアが必要になります。短くても3年、長ければ20年以上、或いは生きていく間ずっとそれが必要です。「家庭に帰す」と言われますけれど、保護者の状態が改善されていない限り、虐待は繰り返されます。こうした負の連鎖を回避するためにも、保護者と子どもの両方のケアが必要でしょう。

家族が四方八方に散らばっているという子も多いです。親のいる場所をきちんとつかめている里子たちはほんのわずかです。そうした子にとっては、「帰れる家」が必要です。それは多くは里親の家なんです。精神的な面もですが、子ども達が経済的に困ることもあって、そうした時は、現状では里親が出してやっている状態です。

しかし最近では、学習支援のための「塾」の費用が出るようになりました。里子の多くは、家庭的に恵まれないまま里親家庭に来るので、学習能力が低い子も多いのです。塾に入れるための費用の支援が、やっと実現しました。でも塾の他にも、子どもの心の安定のために習い事などもさせますが、それはそれぞれが、里親手当からの費用で出しています。子どもたちには、安定した考え方、心を伸ばすような形で人生を過ごさせたいんです。心の中に抱えた問題をクリアしていく精神力を持たせたいと考えます。

里親をしてよかったと思うのは、子どもたちが結婚した後かもしれません。結婚して赤ちゃんを産んで、その子たちをちゃんと育てるところを見てやっと、ああよかったと思う。ちゃんと愛情が伝わったかどうか。きちんと尊敬できる人がいるかどうか。または夫や妻とちゃんとやっつけられるかどうか。それが大きな問題でしょう。人の目を見ながらしか、自分の行動を決められないかのような子どもたち

の目の動きを見ると、本当にかわいそうです。きちんと自分の目で見て、きちんと批判できる。自分はこうだと決められる。本当の自立心をもつところを目指して、里子の養育をしてきています。そのために必要な支援はなにか。ひとつは、子どもたちの自立のための費用です。各方面に種々働きかけて、子どもたちに自立のためのお金が貸し出されるようになりました。手術のお金とか資格を取るためのお金を、基金を作って貸し出すようになりました。貸したものはちゃんと返すということで、里親とのつながりを長く持てるようになりました。30 過ぎてもつながってられる。そういうことも考えています。

**司会 (中山) :** ありがとうございます。様々な里子の持つ問題、その中で自立をしていくために、どんなサポート機関が必要かをお話しいただきました。

ご質問は後にして、引き続き青葉さんにお話しいただこうと思います。では、青葉さんお願いいたします。

#### パネリスト 青葉紘宇 (東京養育家庭の会理事長)

**青葉 :** 長年何人もの里子にアロマザーをやってきて、「養育の可能性と限界」というテーマで、何をお話ししようか悩んでいたんですが、今直面している子の例をお話ししようと思います。その子はアロマザリングで言うと失敗例です。失敗をどう克服したかというあたりの話に行けばいいなあと考えて、お話をしようと思います。なお「東京養育家庭の会」の里親登録数は約 550 名、子どもを受託している里親は約 50 名です。私個人の受託里子数は、短期 (1 年から 3 年) の子が多いので、全部で 30 名を超えております。



#### ＜ある里子の事例＞

その子はお母さんが早く亡くなりまして、お父さんは精神病院のようなところに入ってしまって、もう交流ができないという状況なんです。今はもう 28 歳になっています。

乳児院から養護施設に回って、小学校 1 年の時にある里親さんの家に行きました。10 年間里親の家で暮らして、高校 3 年の 11 月にブチ切れて、里親の家を飛び出しました。行くところがないので、高校卒業までということで我が家に来ました。家に来たら、なんでブチ切れたのか全然わからない、普通のおとなしくていい子でした。卒業後は、もう大学も間に合わないし、就職の準備もあまりできなかったもので、6 か月から 1 年ぐらい預かってもらって、そこから就職するという自立援助ホームにいったんです。そこもうまくいって、大手の服飾メーカーに就職できたんです。そこまでは良かったんですね。

その服飾メーカーに入ってから喧嘩が始まりました。同僚とすぐ喧嘩しちゃうんです。なんで喧嘩するのわからないんですけど、喧嘩ばかりする。そのうちいろんなことがありまして、喧嘩するたびに職業を変えることになりました、職業を変えると段々給料も下がるんですね。派遣からアルバイトへ。そういうことをしているうちに住むところがなくなりまして、旅館の住み込みのアルバイトをやりながら、宿舎付きの仕事を転々とするようになりました。

そんなことをやっているうちに、たまたま我が家には里子がいっぱいいたもんですから、いき場のなくなった里子が何人か集まって、下宿屋をやっちゃおうといことで、下宿屋を始めました。その子はそこへ戻ってきたんです。住民票を下宿において、また旅館へ働きに行くような生活です。健康保険が使えなくなると困るから、そのために住民票を置いたということなんです。そういう生活を続けていました。

これはアロマザリングの失敗なんでしょうけれど、何故失敗したかがわからないんですよ。話を聞くと、ご飯を食べるのが遅いからと注意されて、みそ汁とご飯を一緒にガチャガチャと混ぜて頭から掛けられたとか、いろんなことを言うんです。かなりいろんなことがあったのかとは思いますが、私、実はその里親さんも知っております。仲間だから。そんなことはないのになあと思いながら、そのうちに全国里親会の会報でね、この話を聞きつけまして取材が来て、「里親に殴られた」というので大きく出たんですよ。ご飯掛けられたとかそういうのも。

でも、なかなか面白い子でね、高校卒業した次の日、キンキラキンの金髪にして帰ってきたんですよ。「おーすごいなあ」「商店街歩くの恥ずかしいよ」なんて言って。卒業後は、すぐに自立援助ホームに入るんですけど、入るにあたっては茶髪が禁止っていう規則があるんですね。それで、またすぐに今度は黒く染め直しました。一回染めると1万5000円かかるんで、「3万かかった」ってブーブー言っていましたけど、なんか愉快で愛せる子なんです。

じゃあ、彼はどんなことで頭に来るのか。彼がフェイスブックに自分の愚痴を載せていたのを、たまたま私も見られるようになったんです。クリックしたら、喧嘩した話がいっぱい載っているんですね。一番最近、彼が何で喧嘩したか、その時の言葉をご紹介します。

人間相手のアルバイトで一杯飲み屋かなんかでのことだと思うんです。挨拶するときには膝をつけてお客様と目線を一緒にして話す職場です。

「膝ついて、わざとらしいんだよな」「店長が横にいるからやるんじゃねえの」というのが始まりまして、同僚から「お前は客商売向かない」と言われたらしいんです。そういうやり取りが書いてありましてね、「向いてないよ」「だからそれが舐めてんだってよお」とかね、こういう調子で書いてあるんですね。「いちバイトの貴様が言うことじゃねえんだ、この野郎」とかね。「あざとすぎるんだこの野郎」「勘違いも甚だしいんだこの野郎」と、「この野郎」がずっと続くんです。「マジで向いてないのはお前の方じゃないんですか」とか書いてあるわけです。

私はね、「こんなこと書いちゃダメだ」って伝えたわけですよ、この時ね。「こんなバカなこと言うんじゃないよ」って。でも、同じ年位の里子仲間に見せると、「いや、みんなこんなこと誰でも思ってたよ」って言うんです。そして、「こいつは、ついに芸術家の境地に達したな」っていうんですね。確かに、この書きぶりといいなるといい、絶叫する歌っていうかあれですよ。ね。「おおそうか、これが芸術かあ」って。私はね、芸術だとは気がつかなかったなあ…お説教してたんですよ。

その子はね、友達の前でこれをやっちゃうんです。だから、次の日にはいられなくなっちゃうんですね。それでまた、次のところに行くという。だからね、まるで寅さんみたいなんです。我が家に住所があるんですけど、あまり寄り付かない。月に1回くらい、旅館が変わるときに来ちゃあ、一日ぐらい風呂に入ってまたいなくなるんですよ。本当にまあ寅さんですよ。

この子がね、「乳児院から養護施設に回って、不幸な人生を歩んだ」って言うんだけど、別に寅さん不幸じゃないよなあっていう感じが最近してきましてね、人間の不幸と幸福ってよくわからなくなってきましたね。

そんなところが、アロマザリングが人間的っていうか、家族的な付き合いをすると、こんな感じの境地とかやり取りが始まるんで、とっても楽しいんです、今。これは一例でね、他にもいっぱいいろんな子がいるんです。

日高さんは結婚するまでっておっしゃったけど、実はねその続きがあるんです。今度はね、嫁さんとの関係が出てくるんです。嫁さんは社会的養護知らないでしょ。そうするとね、言葉は悪いんですが、里子を軽蔑するんですよ。嫁さんの家族というのは、里親とか里子というのを低く見るんです。それで、どうしても嫁さんペースになっちゃうんですよ。

私も、里子が子ども連れてきた時に抱っこなんかすると、抱っこの仕方が悪いとか何とか嫁さんが言うんです。だけど、私の方が先輩だぞって喧嘩したんです。そしたら今度はお嫁さんはね、私に子どもを抱っこさせてくれなくなっちゃったんです。今、嫁さんと私が冷たい関係になってます。

なんていう、ねえ、楽しいね、ここまでくると。ということで、アロマザリング、楽しい話もあるということで私の話を終わります。

**司会 (中山)**：どうもありがとうございました。お2人とも日々の体験を通じて思われていることを、テーマに関係してお話いただきました。まず、根ヶ山先生、何かお気づきの点、ご質問などがあればお願いいたします。

**根ヶ山**：とても生々しい話で、まず日高さんの話からは「親子相談所」というものに意味があると教えていただきました。ここに「協力員」を置きたいということでしたが、具体的にどんなチームワークでどんな支援をしていくのか、独特の取り組みがあるのであれば知りたいと思いました。

1部の終わりには大学がコーディネーターするという話が出ていましたね。私は今日、研究者としてちょっと硬いお話をしましたが、皆さんが話された現場の実践の中でのコーディネーターを考えるとしたら何ができるのか。例えば、親子相談所のようなところに研究者が入って理論的な裏付けをする。また、結婚後の嫁さんとのお話もありましたが、いったいどの段階で成功や失敗といった最終判断をすべきなのかなど、専門家（研究者）が入ってエビデンスを取っていくというようなことがあったら良いのではないかと思います。今は、行政と実践家だけで話が回っているように思うんですね。私は大学人だからかもしれませんが、そのあたりに疑問が出てまいりました。

青葉さんのお話は、不思議な気持ちで聞きました。例に挙げられた青年は、荒れるということがあってどんどん仕事を変えていく。不適應の姿のようですが、それをソーシャルネットワークでシェアをして盛り上げられる仲間がいそうですね。そこに青葉さんも入って、面白がると言ったら失礼かもしれませんが、深刻にならずに距離を置いて評価してらっしゃる感じがして、そういう距離関係というのが、ものの見方としてあるのかと新鮮に思いました。そこで実現している里子さんの社会性を、「結構それって社会性があるじゃないか」と捉えるのか、「いやいや、そういうことをしているから社会に適應できないんだよ」と捉えるのか。どんなふうにそのことを評価してらっしゃるのか興味がわきました。

青葉さんのお話に、里親と里子のお嫁さんのことが出てきました。子供が成長して、そのように新たな夫婦の問題が出てきたり、年老いた親との間で親子関係が別の問題を抱えていった時に、どういう組織、仕組みが、そういった問題を抱えた人たちを支えるのか。日高さんのお話に出ていた「親子相談所」なのか、さらにまた別の組織が必要となってくるのか。そんなお考えも伺いたく思いました。

**司会 (中山)**：里子さんが自己実現を図っていく時に、そこに至るまでの様々な経験、虐待と社会的な差別だとかを里親さんが一緒に抱えて進むときに、それぞれの専門家が必要である。それは、あくまでも協力して一緒に子育てをしていくような立場でいて欲しい。そういうようなニュアンスとお聞きしました。根ヶ山先生も、課題としてのアイデンティティということをお話されていましたね。どういう風に、そのお子さんが自己実現を図っていくのか。簡単ではないことを里親の方々が一生涯懸命寄り添いながらやっているということで、より専門性が必要なのだと理解しました。

青葉さん、是非、青葉さんのかかわり方の中での社会性の育て方とか、研究者への期待とか、その辺をご発言いただけるとありがたいです。

**青葉**：世間一般から不適應というかダメ人間っていうレッテルを押される子は多いんですね、実は。だけど、見方を変えるとちょっと違うなあと思うんです。

中山先生の勉強会に同席させてもらったとき、「レジリエンス＝回復力」みたいなもののお話になるんですが、回復力って、なかなか難しいもんです。でも、自分の考え方を変えれば、別に全然問題ないなあと思うんですね。寅さんがなんで悪いの？本人が選んでいるわけだから、しょうがないんじゃないの。これから専門家のカウンセリングを受けたりなんかして、この人が喧嘩しなくなるかっていうと、もう10年そうだから治らないと思うんですよ。見事に2週間ぐらいで仕事辞めちゃいますからね。でも、次の仕事があるんです。面白いことに。

まあ本当にいろいろあるんです。新宿二丁目でね、やくざに追っかけられたとか、身ぐるみはがれたとか。警察に行ったら「新宿2丁目じゃ当たり前だから、事件として取り上げません」って言われたとかね。話を聞いていると楽しいんですよ。パスポートを取り上げられたっていうので、仕方がなくて弁護士さんを頼んで電話してもらったら一発で解決したとか。ね、生きる知恵でしょ、新宿2丁目のね。だから、「レジリエンス」とかも考え方を変えるといいのかなって。私もそういうのに慣れちゃいました。

我が家では「飢え死にしない」というのを目的にしているんです。「飢え死にしないきゃ立派だよ」って話しています。そしたら面白いことにですね、スーパーの売れ残り、賞味期限がきたやつをどっと集める会社があるんですが、そこに行ってリュックサック一杯もらって帰ってくるんです。それを私にプレゼントしてくれるわけです。それだけはお前ちょっと勘弁してくれよって・・・(笑)。そういう生き方もあるんだなあって。しょうがない、言ってもわからないんですから。

研究者の方の協力ということなんですけども、今みたいな境地を研究者の方に理解してくれって言っても、私無理だと思うんですね。これはちょっと言い方が難しいんですが、カウンセリングを受けて深層心理を分析してって話に必ずなるんですね。この子もね、うちに来た時にやっぱり「おれ、おかしいんじゃないか」ってなって、自分から「医者紹介してくれ」って言ったんです。受診してね、元気になって帰ってきちゃった。「俺、うつ病って言われたよ。」って明るく。「分裂病って言われるのが怖かったんだよ。うつ病でよかったよ」って言って帰ってきたんです。そういうレベルの話を、研究者に理解してもらうのは難しいかなって、ちょっと考えちゃいます。

**司会 (中山) :** ありがとうございます。もっともとお話ししたいと思うのですが、時計を見ると4時半を過ぎました。2部は40分までを予定していますので、私がこれから提案することによってよろしければ拍手を頂きたいです。

この2部のまとめは深谷先生にさせていただく。レジリエンスの話は深谷和子先生がいらっしゃればと思うんですけど、深谷昌志先生も良くお聞きになっていらっしゃると思いますので、関連してまとめて下さい。それが終わったら、今日ご発言されていない方に一言ずつお話、或いはご質問を頂く。そういうことでいかがでしょうか。よろしかったら拍手で(会場拍手)。では、まとめを深谷先生お願いいたします。

**深谷 :** 今日行事の重なる「悪日」のようで、参加したいんだけど無理だという方がかなり多かったんです。それで、今日のこの話は「風の便り」として臨時増刊でお届けしますので、またぜひ丁寧に読んでいただければと思います。

学会としては、今日の後半のようなワークショップ、テーマを決めて、ふだんあまり考えていないことを一緒に考えてみようとして計画しております。ご案内のように1か月後、10月の13日の2時から4時まで、東京駅の近くのルノアールという会議室で、今度は「レジリエンス＝立ち直る力」というのをやります。それから12月1日が、「多国籍化する学校」。この頃、外国籍の子どもがいっぱい来ておりますので、そうした子たちを受け入れる取り組みを、校長先生として頑張っておられた方が千葉大におられるので、その方に来ていただいて、また考えてみようと思っています。来年度も出来たら2、3回、

そのようなテーマを見つけてやっていきたいと思っています。

**司会 (中山) :** 根ヶ山先生、日高さん、青葉さんに、お礼の意味で拍手をしたいなと思います。どうもありがとうございました。

では先ほどご賛同を頂きましたので、まだ発言されていない方に、後ろから順番に一言お願いいたします。できれば短めをお願いできればと思います。

**和田奈々子 :** 放課後児童クラブをやっています。今日は、色々なお話を聞かせていただいて勉強になりました。アロマザリングのお話、放課後児童クラブもやはりその一環になるんだと思うんですけど、やはり保護者の方が行政の機関を 100%信用して預けてくださるかというところが難しいところなのかな、課題になっていくのかなと感じています。

**市川千里 :** 和田先生のところのスタッフです。公的資格はなく、子ども支援士をしています。そういう人でも何かやりたいと思っている地域のお母さんたちが、すごくたくさんいるんです。でも、何をやっていいかわからなくて、地元の小学校でボランティアとして働くぐらいしかないんですね。やりたい、だけど資格がない、どこで何をやっていいかわからない、そういう方がたを、うまく必要なところにつなぐことができればいいなと思いました。

**内山絢子 :** 今日は根ヶ山先生のアロマザリングの話が聞きたくて、聞かせていただいて非常に面白かったと思います。深谷先生のお話も交えて考えると、他者による教育というのが、日本でも、地域社会の教育とか、そういうものとして育っていくといいかなと思います。実践に関しては、こうやって地道に活動しているところがあるんだということで、大変感動して聞かせていただきました。

**塚本文子 :** 小学校で特別支援教室の巡回相談心理士をしています。発達に気になることのあるお子さんを多く見立てたり関わったり、先生方のお話を聞いたりしていますが、子ども食堂や放課後の活動の中にも、やはりそういうお子さんたちはいると思うんです。そういうところでは、どのように工夫して関わられているのかなということを、機会があれば勉強させていただきたいと思いました。

**河村圭 :** 幼稚園にいますが、普段なかなか聞くことができないテーマで有難かったです。私が今日、一番感じたのは青葉先生の「寅さんも素敵じゃないか」という考え方です。価値観の多様化の中で、人にとっての幸せって何かなって考えた時に、それぞれなんだっていうこと。目の前の子ども達を見た時にそういう風に考えられることが大事かなって思いました。色々考えさせられた良い会になりました。

**三輪ひろ美 :** 警察で少年相談員というのをしています。子ども達を加害者にも被害者にもさせないと日々動いているのですが、色々やっちゃう子はいます。でも、やっちゃったことを「相談の申込書を出したんだ」という風に私たちは捉え、同じことが起きた時に法を犯さずに済むやり方を支援してお手伝いしています。

「気持ちはわかるけどそれはやっちゃいかんよ」ということを話しているんですが、同じことをさせないために私たちはあらゆることをします。やってしまった子でさえそれだけ手厚い支援を受けるわけだから、やっちゃわないでいる子、我慢している子たちにはもっと手厚い支援があっただけいいと思っています。ですので、日高さんがおっしゃった、色々な人が協力員として子どもを支えるという考え方は、本当にそうだなあと思いました。

一方、私の一人娘は 6 年間学童でお世話になりました。学童の活動の中でキャンプがあり、親子で 2

泊3日行くんです。その時に、「半親さん」と言って、自分の子どもじゃない子を面倒見るというシステムがあります。うちは一人娘なので積極的に男の子を見ます。学んだり反省したり、こんな風にしちゃってもいいんだと発見する。その後もずっと、親たちの間で育児の大変さを共有しながら来ていますので、その制度には助けられたなと思っています。

**河村真理子**：今日はとっても勉強になりました。子ども支援学会というのは、現場の方、行政の方、研究者の方、いろんな分野の方がいらして子どものことを考えるって、私は素晴らしい学会だなと改めて思います。研究者にはわからないとおっしゃらず、研究者の方にも入っていただいて、皆でもっともっと子どものことを考えていきたいなって、ますます思いました。

**斎藤恵子**：保育士養成に携わっています。こんなに盛りだくさんに色々頂いたものを、出来るだけ学生たちに返しながらかやっていたいと思っています。特に、根ヶ山先生がおっしゃっていた「守姉を信頼して、守子を信頼する」という言葉がすごく響いていて、保育の基本は信頼関係ってよく言われるんですけど、子どもを信じるって、時々揺らいでしまうときがあるなあって反省しています。学童の話とか里親の話とか、色々課題はあるんですけど、皆さんの熱い思いの中で動いているんだということが良くわかりました。私もこれから、頑張っていこうと思います。ちなみに私は、寅さんが大好きです。

**由田のぼら**：高校の教諭です。本日途中からになってしまったんですが、色々なお話を聞いて、ああ私も生徒を教える身として、アロマザリングの一端を担っているんだなと思いました。皆さんが持っていらっしゃるものを、今はまず吸収する。知ってからそれを自分も活用するし、いろんな方に救いの手を求めるというシステムを作っていかなきゃなということを再確認させていただきました。

**深谷野亜**：今日はとてもいろんなことを考えさせていただいたんですが、一番考えたのは、北区のわくわく広場のことです。直営でできるってすごいと思うんですよ。今はPTAのなり手がいないという話があります。そういう中で、放課後支援というものを、ある程度自分たちで、地域が担っていくって素晴らしいなと思ったんです。そして、こういうことを通じて地域の教育力は再び育てられるんじゃないかっていうことを課題として考えていきたいなと思いました。

**小川香代子**：アロマザリングの現場、保育園にいます。守姉の話、わかるなあと思いながら聞いていました。5歳になると子どもたちは赤ちゃんのことが大好きで、延長保育の時間には「私はこの子のお姉ちゃん」「この子のお兄ちゃん」という感じで接している様子を見てると、保育園というのはまさにアロマザリングの現場なんだなって思います。保育園の子どもだけと関わっているというのではなく、子ども食堂や放課後支援なんかもやらなきゃいけないなと思って聞いていました。

**綾田雄公**：中野区で放課後支援をしています。自分のところでは、地域の人とどう絡めるかというのが難しい点です。また、子どもたちが甘え方を知らないというか、大人に対しても子ども同士でも、どう自分を発信したらいいかを気にしている子が多いなあと感じています。それだけに、様々な立場の人とかかわることが必要なんだろうなと思いました。

行政からは安心安全な場であればいいということのをベースに置かれているので、どんなに提供したいことがあっても、自分の力だけではできないこともあるなと感じます。そうしたところでどう地域の人たちが関わってくるか、そうしたことも話を聞きながら考えていました。

清田義隆：大学卒業後、父の会社を手伝っていたのですが、子どもの頃から地域活動に取り組んで地域の方々に育てられてきたこともあって、地域活動や地域教育を仕事に生かせないかと進路を模索中です。本日、色々な事例や研究分野というものを知ることができました。自分の将来にも生かすことができたらいいなと思います。ありがとうございました。

司会（中山）：

皆さま、本日は種々会を盛り上げて下さりまして、ありがとうございました。またの学びの機会にお会いしたいと思います。

総合司会（清文枝）：

時間も参りましたので、これで「日本子ども支援学会」の9月のフォーラムのすべてを閉じたいと思います。ありがとうございました。

(以上)



<<参考 URL>>

子どもの成長とアロマザリング

<http://www.nakanishiya.co.jp/book/b361022.html>

ヒトの子育ての進化と文化～アロマザリングの役割を考える～

<http://www.yuhikaku.co.jp/books/detail/9784641173682>

## 編集後記

9月15日に行われました日本子ども支援学会9月フォーラムの（研究報告編）をお届けいたします。根ヶ山光一先生のご講演をいただき、実りある学びの場となりました。なお、容量オーバーで受信できない方は、下記まで、お名前、ご住所をお知らせください。アウトプットをお送りいたします。なお、学会HPにも順次収録していく予定です。

ニューズレター委員会（長） 深谷和子  
(kazukofukaya@nifty.com)

(文責：清文枝・深谷和子)